

## George Eliot : *Scenes of Clerical Life* (1857)

白 田 昭

ここで *Scenes of Clerical Life* を論じるのは、けっしてその欠点を指摘するためではない。その目的は、ただ、文壇登竜門を通過するまでの George Eliot にとって、当時の出版界を支配する小説の通念の圧力がいかに強かったかを、明らかにすることである。George Eliot は後年断然写実的な手法でもって独自性を発揮した作家であるが、その彼女も、登場当初、情緒刺戟という小説の月並調の影響をまぬかれえなかったのであり、この作品が1850年代の小説における浪漫派と写実派の交錯の実情を如実に示していることを、ここで論証したく思うのである。

George Eliot はきわめておずおずと小説を書きはじめた。そのようすは “*How I came to Write Fiction*” という題の1858年12月6日付の彼女の日記に明らかである。彼女は自分の描写の筆力に自信をもちながら、構成と会話の両面における “dramatic power” に欠けると自覚していた。G. H. Lewes と同棲のあと、彼女は試作を Lewes に見せた。Lewes はその具体的描写力に感心し、彼女に小説の才があると知ったが、彼もまた彼女に dramatic power があるとは信じなかった。George Eliot の努力を見守っていた Lewes の意見は、だいたいのところ、彼女が「三文小説を書くことはよもあるまいとしても、その努力は小説至高の内容たる、劇的提示力に欠けるだろう」ということだった。それでも彼は彼女をはげました。そして George Eliot が書き上げた *Amos Barton* 第一章 Cross Farm の描写を読んだとき、Lewes は、自分はこれで安心した、あなたにたくみな会話を書けるとわかったから、と讃辞を述べた。次の問題は George Eliot が「ペーソスを駆使できるか」ということだった。が、それも第8章 Milly の臨終の場面でりっぱに証明され、この部分を読みながら Lewes 夫妻は涙を流したとのことである。こうして *Amos Barton* の原稿は、Lewes の紹介で、George Eliot の筆名のもとに、Blackwood に送られ、採用され、1857年 *Blackwood's Magazine* の1月号から連載された。

しかし、なぜそんなに pathos に気を使わなければならなかったのだろうか。dramatic power とは、はたして good dialogue と pathos だけから成り立っているものだろうか、また pathos は dramatic power にとってそれほど必須不可欠のものなのであろうか。読者を物語の中に引きこみ、作中人物と共感させる、「小説至高の内容」である「劇的提示力」は、作家の天才の

無意識的発揚の結果生じるもので、かならずしも pathos と直接の関係をもつものではない。G. H. Lewes は George Eliot の強固な性質の天分とは無関係に、あるいはその天分のゆえにこそ、市販に耐える小説を書くには、どうしてももっと柔い pathos が必要だと考えたのである。Scenes of Clerical Life 全編を通じてみられる、この pathos への過剰なほどの配慮は、当時の小説についての支配的観念の影響といわざるを得ない。

Scenes of Clerical Life においては、Amos Barton の最初から、主知的リアリズムの意図ははっきり読みとれる。そして George Eliot は Mr. Gilfil's Love-Story をへて、Janet's Repentance での Milby の町の描写に至って、自分の独自性を明確に意識するようになった。しかしこれと相並んでこの作品に情緒刺戟的な手法、題材の存在することも明らかな事実で、作品完成までの間の作者と出版者の意見交換のあとを検討してみると、興味ある事実が明らかとなる。出版者 Blackwood は、この情緒刺戟的部分についてはなんらの疑問を示さず、一方 George Eliot の独自性の発揮されているリアリズムの手法に対しては、世間の好みを配慮して、原稿を読むたびに、多くの抵抗の色をみせているのである。これは情緒刺戟という古い手法の支配がまだ根強く、George Eliot の主知的で写実的な作風が、それほどに目新しかったということの証拠であるといえる。

まず第一話 Amos Barton である。主人公 Amos は「凡庸の精髓」のような男である。非国教徒の出でありながら、Cambridge に学び、Simeon の影響をうけ福音主義にかたむきながら、Oxford Movement が始まると、その感化で High Churchism をもとり入れる mongrel curate である。この男が主人公となる物語の題名が *The Sad Fortunes of the Rev. Amos Barton* であるのだから、その Sad Fortunes なることばは、おそらく ironical に用いられていると、だれしも思う。ところがけっしてそうではない。この Amos Barton は愛妻 Milly の死という悲しい結末に至ると、その哀感を一身に担う人物となる。凡庸の化身 Amos Barton を冷静に観照することを楽しんできた読者として、ほとんど突然に、いまわの息で、“Music—music—didn't you hear it?” とつぶやいてこと切れる、Milly の臨終の場に立ち合わさせられるのは、多少の当惑を伴うことである。われわれの20世紀的偏向が、臨終の愁嘆場をおそれることを念頭において考えても、なおかつ、この感傷性は物語全体の調子を乱すものと思う。

主知的手法に一頭地をぬいた George Eliot の後の発展を思うとき、この Milly の死の扱い方にわれわれはおどろきを感じる。しかし当時の読者には、これはまったく自然なものだった。原稿に最初目を通した Blackwood は、「ミリーの臨終には力がこもっている」と感じ、「たいそう感動<sup>(2)</sup>」した。そして二ヶ月半後にも、Milly の死の場面は、彼にとって、「とても感動的な臨終の場面<sup>(3)</sup>」であった。この場合の Blackwood は、単なる読者、素人批評家ではなく、将来有望の新進作家を発掘しかかっている出版社の経営者だった。大衆の好みを配慮する彼としては、Milly の臨終は結構なものであり、彼が不安を感じたのは、後の George Eliot が本領とした、性格の分析とその記述の部分だった。Blackwood は、同じ手紙の前半の部分で、「たぶ

んこの作者のおちいったあやまちは、作中人物の性格を記述によって説明しようとしすぎて、話のなかでその展開を許さぬところにあるのでしょうか」と述べている。登場人物の行動の華麗さによって読者の目をうばう主情派小説家のやり方に対し、作中人物の行動の合理性、必然性を丹念に説明して、読者を納得させ、理解にもとづく共感をうながすが、主知派小説家の腕のみせどころである。この主知派小説家としての George Eliot の斬新さを表わす、登場人物の性格や行動の分析、説明は、Blackwood にとって、相当の不安を感じさせるものだったが、Milly の死の情緒刺戟的手法は、大衆の支持をかならず得るものと安心ができたのである。

Blackwood は *Amos Barton* を *Blackwood's Magazine* に採用するかどうか、身辺の友人 Hamley 大佐に意見を求めた。この Hamley 大佐なる人物については未詳である。が、おそらく Blackwood は、大衆の反応を知ろうとして、文学にはしろうとの人物を選んだものと考ええる。Hamley 大佐は、作者はおそらく科学者で、あまり筆達者な人ではない。絵画的描写力と豊かな想像力とウィットとユーモアをもっているが、ユーモアのほうはそう表面に現われてこない。その文体は “obscure and laboured” で “sniffing and dirty nose” がありすぎるという、かなりつぼをおさえた評言をよこしてきた。<sup>(4)</sup> 作者が科学者だという想像は、<sup>(5)</sup> “We are poor plants buoyed up by the air-vessel of our conceit.” だとか、<sup>(6)</sup> “This mention of the visitation suggested the Bishop, and thus opened a wide duct which entirely diverted the stream of animadversion from that small pipe—that capillary vessel, the Rev. Amos Barton.” などの例に見られる、耳なれぬ科学用語のせいであるだろう。文体がこりすぎて晦渋というのは、村の養老院の老人 Old Maxum のあだ名の由来の説明、<sup>(7)</sup> “A fine philological sense discerns in this cognomen an indication that the pauper patriarch had once been considered pithy and sententious in his speech.” というのが例になるだろうし、「汚いものをかぎ立てる鼻」とは、George Eliot の即物的、写実的な描写を指すものだろう。こう考えてみると、この Hamley 大佐もまた、George Eliot の主知的資質に抵抗を感じたと結論できるのである。George Eliot あるいはすくなくとも G. H. Lewes. は、これが世間の風潮であることを知っていた。このような雰囲気の中で、George Eliot が小説家としての成功を得るためには、リアリズムの主張を感傷的情緒刺戟という保証つきの方法の薄絹でおおわなければならなかったのであり、その両者の「かね合い」をとることはまさに必要だったのである。

第二話 *Mr. Gilfil's Love-Story* は感傷的メロドラマである。しかし *Amos Barton* の Milly をも含めて、この物語集には短命の人物が多すぎる。Wybrow と Caterina, 次の *Janet's Repentance* の Tryan など、いずれも若くしてその生涯を終えることになっている。Wybrow 大尉を *Adam Bede* の Arthur Donnithorne と、そして Caterina を *Daniel Deronda* の Gwendolen Harleth に比較したくなるのは当然だが、Arthur や Gwendolen の体格と精力があってはじめて、道徳的決疑論の重圧に耐えてゆけるのである。ところが Wybrow 大尉や Caterina は、その境遇において、これら後の作品の人物に似ているものの、生命力の点では格段に劣ってい

る。短編物語集という形式では、重厚な道徳的問題を展開する余裕がなかったのかもしれないが、ここでは George Eliot は、佳人薄命という感傷的状况に頼って、話をこぎれいに片づけてしまったという印象は否定できない。<sup>(8)</sup>

第5章の終りで、Wybrow への狂おしい恋慕の情と、恩義ある Sir Christopher 夫妻への義理との板ばさみになって、Caterina は夜の窓辺でなげく。「このあわれな小さな心が、身にあまる重荷に傷つき、血を流している間に、自然は無感動な、おそろしい美しさで、その冷静にして仮借ない運行を続けていた。星はその永遠の軌道を突進し、潮は最後に残って待ちわびている藻のところまで満ちてきた。太陽は、いと早く回転する地球の裏側に住む、精励な民族たちに、明るい昼間を作ってやっていた。人間の思いや行為の流れは、どんどんと河幅をひろげながら流れていた。天文学者は望遠鏡にとりつき、大きな船は波を乗り越え、あくせく躍気になる商売と、意気さかんに猛り立つ革命は、ほんのつかのま鎮まって、休息していた。そして眠りを忘れた政治家は、明日起こるやもしれぬ危機を恐れていた。ひとつのおそろしい未知から、もうひとつのおそろしい未知へと突進する、この巨大な奔流の中では、われらがかよわきティナとその悩みなど、なんだろうか！それは水滴の中にうごめく生命の極微の中心よりも軽く」と、ここまでは、人間の主観的な苦悩を、雄大な天地運行の客観性と対比させて結構である。しかしここで George Eliot は、自然の雄大さによって、人間の主我的苦悩の倭小さを浮き彫りにし、その対照による克己のストイシズムを説くのではない。彼女は筆をつづける。「長い間探しあぐねた餌をくわえて、やっと巣に舞いおりてきてみると、巣がこわされ、空になっているのを知った、とても小さな小鳥の胸の中の苦悩のうずきのように、人目につかず、かまってもらえないものだった。」これはまことに感傷的な結び方である。Caterina と巣をこわされた小鳥の間にはなんの論理的なつながりもない。それがただ可憐という感傷性だけで、結びつけられているのである。Middlemarch の Dorothea が、朝まだきの真珠色の光の中、仕事に出で立ってゆく夫婦の姿を見て、人間の連帯性を悟り、狭い主我的な悲しみに閉じこもることの愚しさを悟る、後の George Eliot のあの感動的な回心の場面<sup>(9)</sup>とくらべると、ここでは客観世界は抽象的、概念的にしか提示されず、具体的、個別的認識のもつ力に欠けている。しかも、George Eliot は「小鳥の巣」で話をしめくくっているのである。際限なくふくれ上がる人間の主観的意識を、客観世界の規準に合わせて収縮し、正しい大きさ、正しい位置にもどそうとするのが、後の George Eliot の哲学であった。しかしこの作品では、彼女は Caterina の苦悩を述べるに際し、主観の伸張を客観意識によって制御しようとしながら、最後は手放しの感傷の中にただようことで、自らの主張を韜晦したのである。

第三話 *Janet's Repentance* では、George Eliot は保守的、無理解、鈍重な田舎町の雰囲気を書き出すことに成功している。これは、あのせせこましい、人間関係の錯綜する St. Ogg's や Middlemarch の世界の提示にみられる、彼女の将来の発展を予測させるものであり、前二話の成功に自信を得た George Eliot は、この物語で、独自の才を発揮しようと意識していたと

いってよいだろう。しかしその意気ごみは、物語の前半だけにとどまり、散文的な田舎町の宗派對立を描く自然主義的手法に始まったこの物語は、いつのまにか、福音主義の熱意に燃える village saint とその信女の話という、理想主義的内容のものに変質しているのである。

しかしこの物語の原稿を読んだ Blackwood が文句をつけたのは、こういう village saint の物語についてではない。それは前半の Milby の町の雰囲気を描写する部分についてだった。Blackwood は George Eliot に手紙を送り、「物語の進行に実質的に寄与しそうにも思えず、それ自体でもおもしろくはみえぬ人物の描写に、あれほど多くのユーモアをついやすことなどせず、もっと早く話の中にとびこんでもらいたい」と注文をつけ、さらに加えて、あなたの描写は少々あくどいから、筆の調子をやわらげてほしい、と頼んだ。<sup>(10)</sup> *Janet's Repentance* 連載第一回分、1~4章の Blackwood の読後感は、こういうものだった。これが George Eliot の逆鱗にふれた。それももっともだった。Blackwood の手紙は 1857 年 6 月 8 日付で、George Eliot が Blackwood に第二回分 5~9 章の原稿を送ったのは、7 月 7 日である。だから George Eliot はそのとき第二回分の原稿を書いているところだったと推定できる。この第二回分では、George Eliot は醜いもの、卑俗なものの現実ありのままの姿を描くことに、全力を傾けていた。そのことの証拠には以下の事実がある。

第二回連載分の最後第 9 章で、Dempster が Tryan の説教集会を揶揄するため、これを田舎芝居に見立てたちらしをばらまくが、このちらしはいかにも粗笨鈍重な頭脳の持主である田舎弁護士の思いつきそうなもので、そこにはなんのウィットのひらめきも見られない。それを George Eliot は 2 ページにわたって、全文をこまごまと書き出している。これについて、Blackwood は、今ここで述べている George Eliot との衝突が納まったあと、批評を加えて、この部分は長すぎるから、切りつめるか、一般的な言葉で描写しておいたほうがよい、読んでも笑う気持にはならなかった、と述べている。<sup>(11)</sup> これに対し George Eliot は、あなたはこのちらしの意図を誤解しているようだ、これは「Attic witではなく、*Milby wit* として意図されたものであり、ほんとうに鋭利な諷刺は、この場合見当りがいでしょう」と答えている。これが写実主義というものだろう。George Eliot にしてみれば、このちらしでもって Attic wit を発揮するのは容易なことだった。しかし彼女の目的はそこにあつたのではない。彼女は Milby という町、またそれを代表する Dempster という人物の provincialism を、即物的に描くことに余念がなく、そのことに喜びを感じ、そこに自分の独自性の芽生えを意識していたのである。このように George Eliot が写実的描写に創作の喜びを見出し、こよない幸福を感じていたとき、それを非難する Blackwood の先の手紙が届いたわけである。George Eliot の受けたショックの大きさは、後に G. H. Lewes が Blackwood に手紙を送り、あんまり批評がましいことはいわぬほうがよいと忠告している<sup>(13)</sup> ことから、およそ想像できるのである。

そこで George Eliot は語気すどく Blackwood に答えた。「人生や人物についてのわたし自身の考え方からはずれるようなことがあれば、わたしは芸術家としてまったく無力な存在

になるでしょう」と。そしてことばをつづけて、もしこの物語が雑誌掲載にぐあいわるければ、やめにしてもらってもかまわない、返事を聞かせてもらうまでは、校正刷も返送しないから、といい切った。<sup>(14)</sup>これほど George Eliot が怒るとは予想していなかった Blackwood はびっくりした。しかしこんなことで金の卵を産むかもしれぬ牝鶏を手離すはずもない彼は、事態をとりつくろふ融和的な手紙をあわてて送った。それでも彼はその手紙の中で、「この第一回分の調子からして、あまり受けがよかろうとは思いません<sup>(15)</sup>」といている。世間の読者の感性を考慮すれば、あまりあくどい話は遠慮してほしいというのが Blackwood の気持だった。事実彼は Caterina が短剣をふところにして駆け出す場面を、せめて夢の中か幻想だったことにしてはどうだろうと提案しているし、<sup>(16)</sup>Dempster の Delirium Tremens の描写もしつこすぎるのではないかとほめかしている。<sup>(17)</sup>

一見発止と刃を交わしたかに見えた作者と出版者の間には、しかし、それぞれ妥協に向わねばならぬ素地があった。Blackwood はもちろん George Eliot の今後の成長に商業的期待をかけていたし、George Eliot のほうでも、登竜門をくぐるためには、Blackwood という手づるはぜひ必要だった。だから応酬はただの一合で終わった。連載第二回分の原稿を見た Blackwood は、本来主役となるはずの Tryan と Janet が、舞台のうしろにひっこみすぎていると批評するだけにしているし、<sup>(18)</sup>George Eliot もおとなしく「次回の興味は完全に Janet と Tryan 氏に向けられるでしょう<sup>(19)</sup>」と約束している。そして連載第三回分は、Dempster の Tryan 排斥の試みが失敗に終り、町の同情はようやく圧倒的に Tryan のほうにかたむいていったことから始まり、あとは village saint と信女の話になっているのである。このように Blackwood の最初の批評は、きわめて効力があった。いったん反撥を感じたものの、George Eliot は一時自己の主張の矛をおさめ、Blackwood の意見に従って、情緒刺戟的手法に頼ることにしたのである。

ところで George Eliot の小説の特色は、「内なる円（道徳的ディレンマにまきこまれた少数の個人の集まり）が、外なる円（そのディレンマが解決される社会的な場）にとりかこまれている<sup>(20)</sup>」ところにあると指摘されている。George Eliot の小説は、つねにこの二つの円の相関関係によって成り立っているといつてよい。The Mill on the Floss では、St. Ogg's が外なる円であり、その偏狭さ、無理解さのため、内なる円の Maggie の高邁な憧憬が、たえずくじかれ、足をひっぱられるところに話の中心がある。Middlemarch でも Lydgate や Dorothea の大望が、外なる円 Middlemarch のため、あるいは失敗し、あるいは棒から針ほどに割引きされるところに興味が集まる。

ところが Janet's Repentance では、話が Milby という外なる円の世界の丹念な描写ではじまりながら、後半になると、この外なる円は消滅し、Tryan と Janet の住む内なる円だけが、遊離した状態で存在する。外なる円とは客観世界、内なる円とは主観の世界である。前者の抑制なしに、後者が自由に伸張するのは、George Eliot の小説らしからぬことである。Janet と Tryan の信仰に結ばれた愛が、不自然で、宙に浮いたものに見えるのも、最初彼らをとりまい

ていた Milby の町がいつの間にか消え失せているからである。

この物語の第10章、つまり George Eliot が Blackwood に、以後は Tryan と Janet を物語の中心にすえると約束したあとの最初の章、で、彼女は Tryan のことを述べて、「批評家の鳥瞰的な目で彼を眺める人は、キリスト教をあまりにも狭隘な教義体系と考へこむあやまちを犯しているとか、神のみわざを俗世と肉と悪魔に対立したものと考えることに終始しすぎているとか、彼の知的教養はあまりにもせまいとか、いうこともできるだろう。しかしわたしはそんな高みに立っているものではない。わたしは冷淡な同胞の群の中で、石ころだらけの道を苦労して進んでゆく彼と、同じ水準にあり、同じ雑沓の中に立っているのである」といっている。これが George Eliot の弁解なのである。彼女が否定する「高み」に立つてこそ、Milby という外なる円をも視野の中に収めることができるのである。この立場を捨ててしまうと、目は Tryan に密着し、「石ころだらけの道を苦労して進む」姿は写実的には描かれず、主観的嘆賞をこめて、Tryan の姿を理想主義的に提示するにとどまってしまう。そしてその結果は、もちろん George Eliot に手腕の不足があったわけではないが、

Poets heap virtues, painters gems at will,  
And show their zeal, and hide their want of skill.<sup>(21)</sup>

という、Pope の対句を連想させるようなものになるのである。George Eliot が自分の本領にもとづく俯瞰的な見方を、ここでみずから放棄したのは、Blackwood の批評のせいであり、その背後にある大衆の好み、古い小説の因襲の圧力のなせる業である。そして George Eliot は、Blackwood の忠告めいた批評に辟易し、*Janet's Repentance* 以後も書きつづけて三巻の物語集を作ろうという最初のつもりを捨て、Blackwood の影響から自由になろうと心に決めたのである。<sup>(22)</sup>

*Scenes of Clerical Life* には、後年の George Eliot の発展を予想させる多くの萌芽が含まれている。そして将来のあの重厚な道徳的問題を もりこむまでには至っていないとしても、彼女の独自性を示す写実的手法は、あざやかにその頭角を現わしている。そしてこの物語集についてたえず指摘される感傷性の欠点は、Blackwood の批評の代表する情緒主義の風潮への妥協のあとを示すものである。しかし George Eliot の目的は、ともかく文壇に地位を確保することであり、そのためにはこの妥協は必要なことだった。だからこの感傷性の欠点をとがめるよりも、このような妥協をなし、その結果、主知的リアリズムと感傷性という背反的要素を内蔵しつつも、なお今日読むに耐える物語を作り上げた George Eliot の筆力にこそ、われわれは敬意を表すべきだろう。そして1850年代において、新登場の主知主義的傾向は、いまだ残存する情緒主義の勢力と、かく交錯していたのである。

註

(1) G. S. Haight; *The George Eliot Letters*. vol. II, pp. 406~10.

(2) *ibid.* p. 273.

- (3) *ibid.* p. 290.
- (4) *ibid.* p. 291 note.
- (5) *Amos Barton* ; Chap. II, p. 20. 以後ページ数は Cabinet Edition による。
- (6) *ibid.* Chap. VI, p. 92.
- (7) *ibid.* Chap. II, p. 36.
- (8) この点については Barbara Hardy : *The Novels of George Eliot* p. 204. にも同様の指摘がある。
- (9) *Middlemarch* ; Chap. LXXX.
- (10) G. S. Haight, *op. cit.* vol. II, p. 345.
- (11) *ibid.* p. 360.
- (12) *ibid.* p. 362.
- (13) *ibid.* pp. 363~4.
- (14) *ibid.* p. 348.
- (15) *ibid.* p. 352.
- (16) *ibid.* p. 308.
- (17) *ibid.* p. 387.
- (18) *ibid.* p. 359.
- (19) *ibid.* p. 362.
- (20) Joan Bennett ; *George Eliot*, p. 101.
- (21) A. Pope; *Of the Characters of Women* II. 185~6.
- (22) G. S. Haight, *op. cit.* vol. II. pp. 409~10.